



A RIPPLE V & 3DAP Japan LLC Presentation

A RIPPLE V Release

Putney Swope

パトニー・スウォープ

デジタル・レストア・バージョン

A film by Robert Downey

ロバート・ダウニー 監督作品

1969, 85minutes, USA, Herald Productions

白黒・カラー

Featuring アーノルド・ジョンソン、ローラ・グリーン

with バディ・バトラー、アンソニー・ファーガス、ローレンス・ウォルフ

2022/03/30

RIPPLE V

解説

2021年7月7日、85歳でこの世を去ったロバート・ダウニー。

息子でありハリウッドを代表するスター俳優であるダウニー・Jr.はインスタグラムに父親について投稿し、「昨夜、パーキンソン病に何年も耐えた後、父親は安らかに眠りについた...彼はアメリカ映画界における偉大なる真の異端児だった。」と記した。

カウンターカルチャー時代の風雲児であり、アンダーグラウンド映画の助産師という異名を持ち、晩年はロバート・ダウニー・Jr.の父親として知られたダウニーの代表作が50年余りの時を経て日本初公開される！

本作品が全米映画ファンの間で新たに注目を浴びるきっかけとなったのは、2016年にナショナル・フィルム・レジストリに選出され、その後マーティン・スコセッシが設立したフィルム・ファンデーションとアカデミーフィルムアーカイブによって2019年にデジタル復元がなされたことである。この復元においては、アメリカの優れた映画を後世に残すことを目的として設立されたジョージ・ルーカス・ファミリー・ファンデーションも資金提供をしている。

1960年代のニューヨーク。マディソン・アベニューにある名門広告会社の創業者が突然亡くなり、会社の唯一の黒人役員（といっても楽曲担当）であるパトニー・スウォープが予想外の結果によって新社長に選出される。早速、スウォープは会社の名前をTruth and Soulに変更し、ほぼすべての白人役員を解雇してしまう。破壊的で奇抜で斬新だが悪趣味ともいえる過激な広告キャンペーンは次々とヒット商品を生み出し、会社は新たな成功へと飛躍する中、何とスウォープは国家安全保障への脅威であるとして、アメリカ大統領ミミオの陰謀に巻き込まれることになる...

本作品は意外なことに興行的な成功を収めることとなった。ロバート・ダウニー監督は後のインタビューで当時を振り返り、ヒットをもたらした要因は二つあり、一つは当時ニューヨークで映画館チェーンを運営していたロバート・ルゴフがこの作品を配給してくれたこと。もう一つはジェーン・フォンダがテレビのトーク番組で絶対に見るべき映画と発言してくれたことだと語っている。

また1990年代に入って「ブギーナイツ」「マグノリア」のポール・トーマス・アンダーソン監督は本作品を最も影響を受けた作品の一つに挙げ、自身の作品にロバート・ダウニーを役者として起用してファンとしての敬意を表した。

RIPPLE V

ロバート・ダウニーは本作で監督とともに製作と脚本を手掛けている。アソシエイト・プロデューサーを務めたのは、後にアンリ・パチャードという名で、ポルノ映画界で大成功を納めるロナルド・サリバン。撮影は2005年にアカデミー技術功労賞を受賞したジェラルド・コッツ。編集は1974年「エクソシスト」、1984年「フラッシュダンス」で二度アカデミー賞にノミネートされたバド・S・スミス。音楽はダウニー監督の次作『Pound』（未公開）でもタッグを組むチャーリー・クーバによるオリジナル楽曲。タイトル・デザインを全米屈指の広告デザイン・チーム、チャマイエフ&ガイスマーが手掛けたことも大きな注目に値する。NBC ネットワーク、パンナム、モービル石油など彼らが手がけた百を超える企業ロゴデザインは誰もが一度は目にしたことがあるはず。本作品は、彼らが携わった唯一の映画作品であり、そのシンプルながら大胆なデザインは、大物クリエイターたちがダウニーの時代の先を行く感性に共鳴したであろうことを想像させて余りある。また、本作は白黒作品だが、映画の見どころの一つである数々のユニークなテレビ・コマーシャルはカラー映像となっていて時代の雰囲気鮮明に伝わってくる。

主人公のパトニー・スウォープを演じるのは本作が映画デビューとなるアーノルド・ジョンソン。ただし声はダウニー自身によって吹き替えられた。アーノルド・ジョンソンはその後「黒いジャガー」(71)「ポケットいっぱいの涙」(93)などに出演している。パトニーの妻役に1968年「愛は心に深く」(シドニー・ポワチエ主演)で映画デビューしたローラ・グリーン。パトニーのボディガード役にダウニー監督作品に多く出演し、ブライアン・デ・パルマ監督作品「ロバート・デ・ニーロのブルーマンハッタン BLUE MANHATTAN I・哀愁の摩天楼」(70)にも出演したバディ・バトラー。アラブ人役のアントニオ・ファergusは、その後テレビシリーズ「スタスキー&ハッチ」で一躍有名に。今までの出演作は130本を超えており、現在も活躍中である。メイド役にはエルジビエタ・チゼウスカが扮している。彼女は60年代ポーランドの若手人気女優だったが、65年当時ニューヨーク・タイムズ紙の特派員だったデイヴィッド・ハルバースタムと結婚し夫とともにアメリカへ。本作が最初のアメリカ映画出演作である。傑作の呼び声が高いサリー・カー克蘭ド主演のアメリカ映画「アンナ」(87)は彼女をモデルにしたとされる。劇中のCMシーンに出演するカップル役には、ブロードウェイ・ミュージカル『ヘアー』で共演したロニー・ダイソンとシェリー・プリンプトン。ロニー・ダイソンはワシントンD.C出身のソウル、R&Bシンガー。『ヘアー』では名曲アクエリ阿斯を披露。1970年にレコードデビューするやBillboard Hot 100 シングルチャートでトップ10入りを果たす。シェリー・プリンプトンは本作が映画デビュー作品。アーサー・ペン監督「アリスのレストラン」

RIPPLE V

(69)ジム・マクブライド監督『Glen and Randa』(71・未)などに出演している。娘は女優のマーサ・プリンプトン。メル・ブルックスがカメオ出演しているのもご愛嬌である。

1969年の全米公開時にはポスターが刺激的すぎるとして、各地の映画館で掲載拒否運動が起こったというエピソードがある。それに代弁されるように「パトニー・スウォープ」は独自の過激なユーモアで世の中のあらゆる欺瞞を風刺する時代の先駆者そのものの映画であった。BLM（ブラック・ライブズ・マター）運動などが声高に叫ばれる現代にその先見性をどのように見るか、2022年の今、まさにタイムリーな作品である。

###

RIPPLE V

ストーリー

マディソン・アベニューの広告代理店の最高経営責任者であるエリアス（デビッド・カーク）が、取締役会の途中で亡くなり、取締役会のメンバーは会社の定款によって新しい社長を選出することを余儀なくされる。自分自身に投票することができないというルールがある中で、取締役会の面々は誰も選ばないだろうと、取締役で唯一の黒人男性であるパトニー・スウォープ（アーノルド・ジョンソン）に票を投じてしまう。スウォープは皮肉なことに社長に選ばれ、「会社を変えるつもりはない、変えるくらいならぶっ壊す。」と言い放ち、取締役会のほぼ全員を解雇し、黒人ばかり（ただ一人の白人を除いて）に取締役を置き換えて、会社の名前を Truth&Soul に変更してしまう。

Truth&Soul は、次の三のルールを契約の原則としていた。

1. 酒、タバコ、戦争玩具の宣伝はしない。
2. 社長と話をしたい者は誰でも電話ではなく直接会って話さなければならない。
3. Truth&Soul への報酬は一律 100 万ドルの現金前払いとする。（ただし売り上げが 50%アップしなければ返金する。）

無謀ともいえる新しいルールだがクライアントたちは飛びついた。広告商品は次々と大ヒット、ビジネスは軌道に乗って行く。

そんな会社の成功は小人症のミミオ大統領（ペピー・ヘルミーネ）の耳にも届くほどだった。ミミオ大統領は、レイシストでずる賢いアドバイザー（ローレンス・ウルフ）の会社が作った車「ボーマンシックス」の広告を何とかパトニーにやらせようとする。相手にしないパトニーだったが、大統領も諦めない。結局ボーマンシックスの広告を引き受けることに。側にいた恋人にアイデアを考えさせるが、逆に結婚を迫られる始末。躊躇うことなくパトニーは結婚し、アイデアを手に入れる。しかし、「ボーマンシックス」の広告はあまりに過激すぎたため、ミミオ大統領の怒りをかってしまう。相変わらず奇想天外な CM は次々と量産されていたが、おっぴらに不満をぶちまける社員も現れ始めた。

パトニーは、ミミオ大統領に呼び出され、酒、タバコ、戦争玩具の CM を拒否するのは国家安全保障上の脅威だと脅される。結局パトニーは大統領の圧力に屈しているような振る舞いを見せ、今まで作らなかった CM を準備するようにスタッフに命ずる。方針に反すると反発する役員たちを横目にパトニーは意外な行動に出るのだった...

RIPPLE V

FILMMAKER'S BIOGRAPHY

ロバート・ダウニー：製作・監督・脚本

ロバート・ジョン・エリアス・ジュニアは 1936 年 6 月 24 日に、マンハッタンでハンガリー系ユダヤ人の父親とアイルランド系の母親のもとに生まれ、ロングアイランドで育つ。その後、両親は離婚。彼は 16 歳で高校を中退し継父の姓を名乗って陸軍に入隊する。創作意欲が旺盛だったロバート・ダウニーは陸軍では多くの時間を、小説を書くために費やしていたが、出来上がったものが出版されることはなかった。除隊後は小説とは真逆な世界であるセミプロ野球に挑戦するが断念。その後、戯曲を書き始める。

オフ・オフ・ブロードウェイで出会った仲間から映画制作を勧められたことをきっかけに映画の世界に入り、1964 年に『Babo73』(未)で監督デビュー。多くのアンディ・ウォーホル映画で知られる個性派俳優ティラー・ミードがジョン・F・ケネディがモデルと思われる大統領を演じた。続いて監督した 1966 年の『Chafed Elbows』(未)はニューヨーク・タイムズ紙の映画評論家から高評価を得る。この映画はニューヨークのアート系映画館でロングランヒットとなった。1968 年『No More Excuses』(未)、1969 年の本作品を経て、1970 年にはロバート・ダウニー・Jr の映画デビュー作でもある『Pound』(未)、1972 年『Greaser's Palace』(未)と次々と作品を輩出していった。70 年代初頭にはニューヨーク・パブリック・シアターのプロジェクトに取り組み、1973 年に CBS でデヴィッド・ラーベの演劇『Sticks and Bones』をライブ演出する。その後再び実験的なコメディ映画製作に戻り 1975 年『Two Tons of Turquoise to Taos Tonight』(未)を発表。

80 年代に入ると 1980 年『Up the Academy』(未)、その後テレビシリーズ「トワイライトゾーン」でいくつかのエピソードを監督、1985 年に「ぷつつん放送局 92」(ビデオ)、1987 年「ハリウッド行進曲／私をスタジオに連れてって」(ビデオ)、その後も 1990 年ロバート・ダウニー・Jr 主演『Too Much Sun』(未)、1997 年アリッサ・ミラノ主演による「ヒューゴ・プール」(日本での初劇場公開作品)を手掛けた。最後の作品は 2005 年『Rittenhouse Square』(未)。フィラデルフィアにある公園リッテンハウス・スクエアを舞台にしたドキュメンタリーで、製作は「時計じかけのオレンジ」(71)で製作総指揮を務めたマックス・L・ラブである。

ロバート・ダウニーは暫し俳優としても活躍した。「L.A.大捜査線／狼たちの

RIPPLE V

街」(85)、「ジョニー・ビー・グッド」(88、ビデオ)、「ブギーナイツ」(97)、「マ
グノリア」(99)、「ペントハウス」(11)などに出演している。

###

ロバート・ダウニー: フィルモグラフィー

製作年度	タイトル	クレジット	注
1953	<i>The American Road</i>	撮影	短編
1961	<i>Balls Bluff</i>	監督、脚本、製作	短編
1964	<i>A Touch of Greatness</i>	監督、製作、撮影	ドキュメンタリー
1964	<i>Babo 73</i>	監督、脚本、製作	長編
1965	<i>Sweet Smell of Sex</i>	監督、脚本、撮影	長編
1966	<i>Chaffed Elbows</i>	監督、脚本、製作	長編
1968	<i>No More Excuses</i>	監督、脚本、製作	長編
1969	パトニー・スウォープ	監督、脚本	長編
1969	<i>Naughty Nurse</i>		短編、出演作品

RIPPLE V

1970	<i>Pound</i>	監督、脚本	長編
1971	<i>You've Got to Walk It Like You Talk It or You'll Lose That Beat</i>		長編、出演作品
1971	<i>Is There Sex After Death?</i>		ドキュメンタリー、出演 作品
1971	<i>Cold Turkey</i>	セコンドユニット監督	長編
1972	<i>Greaser's Palace</i>	監督、脚本	長編
1973	<i>Sticks and Bones</i>	監督、脚本	テレビ映画
1975	<i>Two Tons of Turquoise to Taos Tonight</i>	監督、脚本	長編
1980	<i>Up the Academy</i>	監督	長編
1980	<i>The Gong Show Movie</i>	共同脚本	長編
1985	L. A.大走査線/狼たちの街		長編、出演作品
1985— 1986	<i>The Twilight Zone</i>	監督	3 エピソードを監督/

RIPPLE V

			エピソード 『Wordplay』に出演
1986	<i>America</i>	監督、共同脚本	長編
1986	<i>Matlock</i>		エピソード 『Judge Warren Anderson』に 出演
1987	ハリウッド行進曲／ 私をスタジオに連れてって	監督	
1988	<i>Moving Target</i>		テレビ映画、出演作品
1988	ジョニー・ビー・グッド		長編、出演作品、
1988— 1989	<i>1st & Ten</i>		4 エピソード、出演作 品
1991	<i>Too Much Sun</i>	監督、共同脚本	長編
1993	<i>Tales of the City</i>		ミニシリーズ、出演 作品
1994	<i>Hail Caesar</i>		長編、出演作品
1996	<i>Sunchaser</i>		長編、出演作品

RIPPLE V

1997	ヒューゴ・プール	監督、共同脚本	長編
1997	ブギーナイツ		長編、出演作品
1999	マグノリア		長編、出演作品、
2000	<i>The Family Man</i>		長編、出演作品
2004	<i>From Other Worlds</i>		長編、出演作品
2005	<i>Rittenhouse Square</i>	監督	ドキュメンタリー
2011	ペントハウス		長編、出演作品

RIPPLE V

Q & A WITH DIRECTOR ROBERT DOWNEY

「パトニー・スウォープ」の原点は？

私が広告会社で実験的なコマーシャル映像を作っていた頃、私と全く同じ内容の仕事をしている黒人スタッフがいて、ある日、偶然彼の給与明細を見ることがあったのだが、私に比べてはるかに低い額しか支払われていないことがわかった。私はボスのところに行って理由を聞いた。彼の答えは、「もし彼に君と同じ給料を払ったら君の給料を上げなきゃならなくなる。堂々巡りじゃないか。」私はその台詞を使って映画を作ろうと思い、この作品を作り始めたんだが、そのころ実験的なコマーシャルを色々作っていたので、この広告をここでこんなふうに使ったらとかあそこであんな風に使ったらとかやっているうちに広告業界を描くことになったんだ。

広告業界での仕事は？

私が働いていた会社の社長は大の映画好きで、過激なことが大好きだった。会社は映画などのポストプロダクションをやっているグループの一部門だったのだが、その中に、実験的な映像制作をする部署を作ってくれた。ただし、他の社員からは嫌われていた部署だったので地下室がオフィスだったけど。『プリパレーション H』という痔の衛生用品の CM に、アジア系の女の子を起用して、超ズームで撮影して、「何人の痔の痛みにもプリパレーション H なら一拭きしてキスしてさよなら」みたいなコピーを謳ったんだ。クライアントに見せたら、凄く面白いけど絶対に使えないと言われた。CM のフェスティバルに出したりしたよ。あと、ダイアン・ミルズという当時 16 歳のテレビ女優を起用したフェイス・クリームの CM も。120 歳に見えるメイクを施した彼女が棺桶の上に座っていて、クリームをひと塗りするごとに 20 歳若返るという内容で、しまいには、裸の赤ちゃんになるんだ。そんな馬鹿なものを色々作ったよ。とにかく楽しかった。土曜日に撮影して日曜日に完成とか。あの頃の NY は何か新しいことを始めることができる場所だった。映画作りを始めるのには最高の場所だった。

あなた自身でパトニーの役者の吹き替えをしたのは本当ですか？

ああ、本当だ。パトニー役の役者は台詞が全然覚えられなくて、映画は超低予算映画だったので、撮影が少しでも遅れると予算オーバーの危険に晒されてビクビクしていたんだ。そうしたら、カメラマンが言った。「大丈夫だよ。彼は口ひ

RIPPLE V

げがあるだろう。吹き替えたって分からないよ。あんた自身が書いたセリフなんだからあんたが吹き替えればいいじゃないか。」

で、吹き替えることにした。役者は怒っただろうよ。でも、彼はこの映画のことをとても気に入っていたよ。最近、ロサンゼルスで友達にあったら、彼が亡くなったことを教えてくれた。いずれにしても、やらなきゃならなかった。だから、やったんだ。

「パトニー・スウォープ」への反応は？

みんな面白がってはいたよ。だが、いくつもの配給会社に売り込んで誰もが面白がったけど、映画を上映する映画館が見つからないという回答ばかりだった。そんな中で、ドン・ルゴフが現れた。資金調達をしたプロデューサーが彼に試写を見せるところまでこぎつけたんだが、物凄く遅れてやってきてね。試写室の扉をドンドンと叩く奴がいると思ったらルゴフだった。見終わった後に、「わけがわからなかったけどめっちゃくちゃ面白かった。」と言って、即座に配給を引き受けてくれた。彼はいくつもの映画館を運営していてアート系では有名な興行者で、配給もやっていた。実際、私の映画の中で「パトニー・スウォープ」だけがまともに配給、興行された映画だと思う。地方でも上映できた。ある時アリゾナで行われたトーク・ショーに招かれて行ったのだ。その年は「イージー・ライダー」旋風の年で、ジャック・ニコルソンも来ていた。その頃、彼は役者としてではなく脚本家として活動しようとしていた。ショーにはある黒人の俳優もよばれていて、彼が私に「パトニーでは黒人の組合員が正しく扱われていない。」と噛みついてきた。もちろん、「パトニー・スウォープ」で組合員の役者は一人も使っていないけど。いずれにしても彼は「パトニー・スウォープ」は嫌いだった。で、ニコルソンが言ってくれたんだ。「あなたの映画は風刺が効いている。」他にも興味深いことをいくつも言ってくれた。嬉しかったよ。その後、ロビーでニコルソンと一緒にあったんで、「あなたの『旋風の中に馬を進めろ』の脚本はとてもよかった。」って言ったんだ。そしたら、ニコルソンが指を唇に当てて「俺はもう役者一本でいくんだ。」って言ったんだよ。公開後、3年たってからテンプル大学で講演会があってよばれて行った時には、蝶ネクタイにジャケット姿の男がやってきて、「『パトニー・スウォープ』を見たおかげで広告業界に入りました。」って、言うんだ。驚いたね。理解できない。というわけで、「パトニー・スウォープ」を嫌いな人もいれば好きな人もいた。それだけのことだ。

ポール・トーマス・アンダーソンとの関係は？

RIPPLE V

ポールはとてもいい奴だよ。彼とジョナサン・デミとピーター・スラットという名前の男の三人が私の新しい企画をプロデュースしようとしてくれている。ポールは三十代なのに 60 年代のことを私よりもよく知っている。NY のどこで誰がどうしていたとか、まだ生まれてもいないのに。私のことも私よりもよく知っているよ。彼の美しいガールフレンドが色々と教えてくれたよ。彼の映画は「Hard Eight(ハードエイト)」が素晴らしい。あの映画に出ている男(ジョン・C・ライリーかフィリップ・ベイカー・ホール)はまさに私のタイプの役者だ。フィリップ・シーモア・ホフマンもいいよ。彼の一派が作っている映画もいいが。ポールはとにかく 60 年代に熱狂的にはまっていて、ガールフレンドに 60 年代のことを色々と教えていて。何よりも、映画というものをあんなに愛している男は他にいないと思う。

何故、プリンスと？

あの頃は、映画のクレジットはめちゃくちゃに作っていた。●●●の映画とか●●●作品とかのところにプリンス作品っていうのが出てきたら面白いと思ったんだ。「パトニー・スウォープ」の宣伝で、「ジョニー・カーソン・ショー」に出た。そこで、「なぜプリンスと言うのですか？」としつこく聞かれたんで、「キングになるのには若すぎてクイーンには真面目すぎる。」って答えたらすごく受けたんだよ。だから、それの時代以来プリンスはやめたんだけど、また、そのことを持ち出す若い人たちが出てきて…。

今の時代「パトニー・スウォープ」は重要ですか？

当時「パトニー・スウォープ」が重要であったかさえも疑問に思っている。時代の先を行っていたのは間違いないが。1969 年は三週間の間に「パトニー・スウォープ」、「イージー・ライダー」そしてバーバラ・ハーシーの「去年の夏」がいっぺんに出てきたんだ。衝撃的だったよ。アメリカン・オルターナティブとか言われた。まだインデペンデントという言葉がなかった頃だ。その中でも私の映画はアンダーグラウンドだった。「イージー・ライダー」はスタジオ資本が入っている映画だからね。とにかく、これらの映画は当時の社会を描いていた。その時そこで起きていることを。だから、「パトニー・スウォープ」と「イージー・ライダー」は鏡のような存在だ。自分が感情移入できる題材で脚本を書くことが大切だった。映画を作っているのと同時に社会を描いていたんだ。今は、映画を作るのに役者の名前が必要だ。ショーン・ペンとか私の息子とかマルコム・マクドウェルとか…。三年前に彼らがいなければ私の映画『ヒューゴ・プール』はでき

RIPPLE V

なかった。

ーポール・トーマス・アンダーソンのインタビューから
「パトニー・スウォープ」の役者についての諸々のこと。

ジョニー・カーソン・ショーに出た時に、カーソンがミニオ大統領役の小人症の俳優のことを凄く褒めてくれてキャスティングの経緯を聞かれた。彼は、声が魅力的で、役者たちの中で最もうまく台詞を読んだ。それで、キャスティングした。素晴らしかったよ。あと、白人役員をやった物凄い長身の男だが、彼の名前はスタン・ゴッドリー。ブリーカー・ストリートの電話ボックスで電話しているところを見かけて気に入った。その場で「映画に出てみる気はあるか？」と聞いたんだ。素人がガッツを出すと凄いつてのはわかるだろう。ニキビの薬のCMの女の子は君も知っている女優の母親だよ。マーサ・プリンプトンの母親だ。当時『ヘアー』や『ジーザス・クライスト・スーパースター』や『レニー』といったミュージカルの舞台監督だったトム・オホーゲン (Tom O'Hogan) が私の作品の音楽もやってくれていたんだけど、彼の勧めでミュージカルを見に言ったら良い子がいて。それが彼女だったのさ。エアコンのCMの女の子は、ブリーカー・ストリートにあるフィガロっていうレストランのウェイトレス。美人だろ。ボーマン役のラリー・ウルフ (ローレンス・ウルフ) にはうちでやったボール・パーティーで出会った。彼とは先月も会ったけど、全然変わっていない。あのまま。まるで赤ちゃんみたいだった。

ー「パトニー・スウォープ」のポスターや宣伝に関して

あれは配給のドン・ルゴフのアイデアだよ。ポスターの方が映画より出来が良いって言ったら、バカ言ってるんじゃないといわれた。彼は素晴らしい男だ。映画を愛していた。ルゴフに言われて宣伝のためにテレビにも出たよ。トゥナイト・ショーとか二度も出た。でも、映画の成功に最も貢献してくれたのはジェーン・フォンダだ。彼女がジョニー・カーソン・ショーに出て「『イージー・ライダー』も凄いけどもう一本見るべき映画あるわ。」って言うてくれたんだ。ルゴフから翌日電話があって、動員が跳ね上がったって。彼女のおかげで当たったんだ。映画の製作費は27万5千ドルだったから儲かったけど、私の取り分は予算オーバー分の補填に当てられたので殆ど残らなかった。1000ドルくらいかな。

ー若者たちへのアドバイスは？

RIPPLE V

大いにやりたまえ。やりたいことがあるならとにかく作っちゃえ。みんなで週末に集まったりして、わいわいやればいいんだ。後、デジタル化のおかげで小さな映画でも映画館で上映する機会が増えると思う。ロバート・レッドフォードがサンダンス劇場を展開しようとしているみたいだし、全米各地のシネコンと組んであなたの言うところの若者たちが作るような作品を上映するプロジェクトをやっているみたいだ。テレビも積極的に色々な作品に取り組んでいて面白いよ。ここのところテレビ作品ばかりみている。とにかく、私が思うことは、今、この国はあらゆることが保守的でシステム化されているように見えるが、実はルネッサンスが起きているかもしれない。だから、それは無理だと否定されても構わずにやることだ。十年後にはそのシステムが馬鹿にされる時代になっているかもしれないのだから。

*2005年のフィラデルフィア映画祭でのQ&A、2008年のThe Director's Seriesでのインタビュー、2019年のFilm Forumでのインタビュー、および2012年に行われたポール・トーマス・アンダーソンによるインタビューなどから抜粋。

RIPPLE V

ARCHIVAL ARTICLE

The New York Times

独自の作風で物議を醸しだす作品を作り続けてきた映画作家ロバート・ダウニー・シニアが 85 歳で逝去

彼の作品は、「パトニー・スウォープ」が最も有名であるが、いずれも興行的な大成功を収めるような映画ではなかった。しかし、それらは常に物議を醸しだし若い映画監督たちに多大な影響を与えた。

「パトニー・スウォープ」など数々の挑発的な映画を作り、メインストリームに乗ることを拒否しながら、なぜか批評家たちからは支持され、世間を騒がせつづけたロバート・ダウニー・シニアが、マンハッタンの自宅で息を引き取った。85 歳だった。死因はパーキンソン病だったと妻のローズマリー・ロジャースが語った。

1969 年のコメディ「パトニー・スウォープ」は、マディソン・アヴェニューにある広告代理店の社長に誤って就任することとなった黒人の男の物語であるが、多分、これがダウニーの最も有名な作品であろう。

「この手の映画の中で最も正確な描写を実現した映画」とヴィンセント・カンビーはニューヨーク・タイムズの批評欄で賛辞を送り、さらに、「笑えて、生意気で、秀逸。悪趣味で、支離滅裂だが、素晴らしい。よく理解できないが重要な映画」と続けている。

この映画は、ダウニー作品の標準からすると商業的な成功を収めたが、興行収入は 2.7 百万ドルばかりであった。（ちなみにその年に公開された「明日に向かって撃て」は 1 億ドル以上を稼ぎ出している。）しかしながら、その評判は 2016 年にアメリカ議会図書館が、その文化的また歴史的重要性を訴える支援者からの働きかけで、ナショナル・フィルム・レジストリーに選ばれたほどである。

更に熱狂的なファンに崇拜されているのが『Greaser's Palace』（1972 年、未）である。ズートスーツを着たキリストのような男がパラシュートでアメリカ西部の山中に降りてくるところから始まる映画で、ポール・トーマス・アンダーソン（1997 年のヒット作品「ブギーナイツ」でダウニーに小さな役をオファーして

RIPPLE V

いる)は、その影響を認めている。

演劇界のドン・ジョセフ・パップはニューヨーク・タイムズに載ったヴィンセント・キャンビーの素っ気ない批評に抗議して、「ロバート・ダウニーは恐怖を顧みずに死者の世界に降りたち、笑いの悪夢をもたらしたのだ。」としたためた書簡をタイムズのオフィス宛に送りつけてきたほどである。(パップ氏の評価は必ずしも公平ではなかった。当時、ダウニーは彼の数少ないメジャー作品である、デヴィッド・ラーベの戯曲『Stick and Bones』のテレビドラマ化に取り組んでいたのだが、その戯曲はパップ氏の経営する劇場の1971年のヒット作であった。)

「パトニー・スウォープ」と『Greaser's Palace』の間には『Pound』(1970年、未)がある。役者たちが野良犬を演じる政治風刺映画である。「アイアンマン」などで知られるスター俳優ロバート・ダウニー・ジュニアは子犬を演じた。彼はこの時五歳、スクリーン・デビューの作品であった。2000年、ダウニー・Sr.はオールバニー・タイムズ・ユニオン紙のインタビューで、この映画がスタジオを驚愕させた逸話を語った。

「私がユナイテッド・アーティストに行ったらちょうど試写から出てきた役員の一人が言った。『これはアニメーションになるんじゃないかったのか。』彼らは私が可愛らしい犬のアニメーション映画を作っていたんだよ。」

ロバート・ジョン・エリアス・ジュニアはマンハッタンで1936年6月24日に生まれ、ロング・アイランドのロックヴィル・センターで育った。父親はレストランの経営者で母親はベティ・(マクロクリン)・エリアスという名でプロのモデルの仕事をしていた。十代で軍隊に志願するがその際に広告マンであった継父ジム・ダウニーの苗字を名乗った。軍隊でのダウニーは殆どの時間を営倉で過ごした。その間に小説を書いたが、出版されることはなかった。除隊後は一年間マイナーリーグで投手をしたがやめて、その後戯曲の道に進む。

オフ・オフ・ブロードウェイで出会った仲間の一人に後に『Chaffed Elbows』(1966年、未)の撮影を担当することとなるウィリアム・ウェアリングがいて、撮影機材を持っていたことから映画を作ることを提案。その結果、ジョン・F・ケネディがまだ大統領だった時代の1964年に数々のアンディ・ウォーホール映画で知られる俳優のテイラー・ミードがアメリカ合衆国大統領役で主演する『Babo73』(未)という映画が出来上がることとなる。まさに古典的なアンダーグラウンドの映画作りであった。

「我々は、プレスパスも入館証もなしにホワイトハウスに行って撮影を始めたんだ。」

RIPPLE V

ダウニー氏は2004年刊行の『Film Voices: Interviews From Post Script』の中に収録されているインタビューで次のように語っている。「ケネディはヨーロッパに行っていて、当時はセキュリティも大して強固じゃなかった。我々はホワイトハウスの周りを走り回って撮影した。テイラーを何人かの本物の将軍たちの中に放り込んだりしたよ。」

予算は3000ドルの映画だったと彼は言う。

ダウニー氏の『Chaffed Elbows』は地球のねじが狂ったある一日の出来事を描いた作品で1966年に公開されたが、彼にとってある種の大きな転機をもたらした。ニューヨーク・タイムズ専属の生真面目な評論家ボズレー・クラウザーは次のように書いている。「ロバード・ダウニーがプロデュースし、脚本も監督もこなした『Chaffed Elbows』というアンダーグラウンド映画が昨夜ダウントウン・ゲイト・シアターで封切られた。この映画は彼自身を少しばかり浄化し、これまで彼の口から発せられてきた汚い言葉を洗い流すこととなった。皮肉で風刺に満ちたコメディイイという意味で成熟した注目を集めるのに値する作品。ダウニーは大胆不敵で、ウィットを持ち合わせている。」

映画はゲイト・シアターとブリーカー・ストリート・シネマでロングランすることとなった。1968年に『No More Excuses』(未)を、続いて「パトニー・スウォープ」、『Pound』、そして『Greaser's Palace』を送り出す。しかし1970年代に入るとダウニーはコカインに染まっていく。

「コカインと付き合い続けた10年間だった。」1997年にダウニーは、アソシエイト・プレスに語っている。彼の作品の数本に出演したエルシー・フォードと結婚するが破局。離婚へ。二人目の妻、ローラ・アーネストがダウニーを中毒から救った。彼女は1994年に死去。ALSまたの名をルー・ゲーリック病として知られる難病が原因であった。ダウニー氏はその体験を彼の最後の映画「ヒューゴ・プール」(1997)で描いている。

ダウニー氏の家族には、妻と息子のほかに娘のアリソン・ダウニー、義理の娘のネル・ミクリン、弟のジム・ダウニー、妹のナンシー・コナー、三人の孫と三人の義理の孫がいる。

ダウニー氏の映画は近年、あらたな評価を得ている。2008年にはイースト・ヴィレッジにあるアンソロジー・フィルム・アーカイブズが映画の保存のために結成されたNPO法人であるフィルム・ファンデーションの援助を受けて、現存する『Chaffed Elbows』、『Babo73』、『No More Excuses』を修復した。その時、ファンデーションの役員だったマーティン・スコセッシは、それらの作品を「真

RIPPLE V

のインデペンデントと呼べるアメリカ映画が生まれた最も重要な瞬間」と称した。

「こうありたいと願う形態を守る数少ない映画である。」スコセッシ氏はニューヨーク・タイムズに語った。「なぜならばそれは可能性を追求する興奮を具現化しているからである。」

ダウニー氏はそのような賛辞に縮こまった。

「作品はでこぼこだ。」自身の映画のことをそう形容した。「でも、私自身もでこぼこだった。」とも。

ザ・ニューヨーク・タイムズ

2021年7月7日

###

RIPPLE V

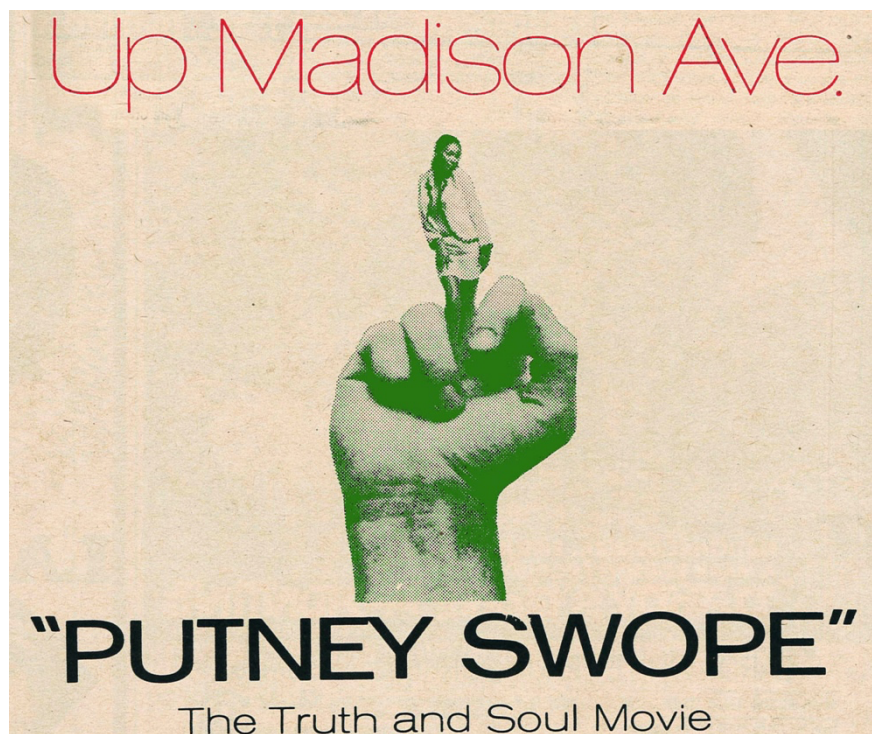


ムービー・ジャーナル:

ロバート・ダウニー・シニアが『パトニー・スウォープ』を語る。
このイカれた映画がビックスクリーンにお目見えした日を思い出しながら

by ジョナス・メカス

1968年11月21日、ヴォイス誌の読者はハワード・スミスのコラム『シーンズ』に掲載された当時ニューヨークで撮影中だったある映画の特出しワン・シーンとそれに付随する記事を眼にしたはずである。



多くの人は、広告制作中のクルーを扱った映画のワン・シーンと聞いただけで奇妙な内容の映画を思い浮かべるだろうが、その広告代理店がブラック・パワー・ムーブメントと一緒にあって「トゥルース・アンド・ソウル社」と名乗ったとしたら何を想像するだろうか。自らプリンスと称し『Chafed Elbows』や『No More Excuses』で、風刺たっぷりの低予算映画の s 助産師として名を馳せているボブ・

RIPPLE V

ダウニー（写真右）が「パトニー・スウォープ」で大きな賭けに出た。主演はアーノルド・ジョンソン（左）。他ミュージカル『ヘアー』に出演中の若手俳優が数人出演。マディソン・アヴェニューを震撼させる脚本。製作費は20万ドルである。撮影は目下グリニッチ・ヴィレッジ、コネチカット、マンハッタンオフィス群そしてグレート・ジョーンズ・ストリーの路地などで極秘裏に行われている。あと数週間で撮影終了の予定。



その8か月後、記憶力のよい読者はヴィレッジ・ボイス誌に1969年7月10日に掲載された映画の広告に眼を瞞ったことに違いない。

RIPPLE V

the village VOICE, July 10, 1969 Page Forty-five

Warwick at Festival

Dionne Warwick and Sam & Dave will open the 1969 Forest Hills Music Festival on Saturday, July 12, at the Forest Hills Tennis Stadium. Other artists scheduled to appear are: Janis Joplin and Richie Havens on July 19; Blood, Sweat & Tears on July 26; Steve Lawrence and Eydie Gorme on August 2; The Fifth Dimension on August 16; and Peter, Paul & Mary on August 23. Tickets are available at all Singer Sewing Centers.

HELD OVER 4th WEEK

TITICUT FOLLIES

Warrendale

The CINEMA VILLAGE

12th St. East of 5th Ave. WA 4-3363

"INTELLIGENT AND PERCEPTIVE! LITERATE AND OFTEN FUNNY, THE KIND OF DIALOGUE THAT SOUNDS LIKE REAL TALK. IT IS A VERY COMPLETE FILM!" —Vincent Canby, N.Y. Times

"EXTRAORDINARILY INCISIVE! Amazingly sharp realism! Excellent performances add dimension and force to the drama. Everyone is in perfect emotional gear with everyone else." —Archer Winston, N.Y. Post

Rod Steiger
Claire Bloom
Judy Geeson

"3 into 2 won't go"

Peggy Ashcroft • Paul Rogers

PLAZA
58th St East of Madison Ave. • EL 5-3220

ORLEANS
4th St. Bet. 8th Ave & 9th Ave. • DT 3-2653

"ALEXANDER IS VERY NOW!"
—Judith Crist



BE HAPPY!

EXCLUSIVE NEW YORK ENGAGEMENT

ART
8th St East of 5th Ave

Up Madison Ave.



"PUTNEY SWOPE"

The Truth and Soul Movie

Cinema II, 3rd Avenue at 60th St. • PL 3-0774 S. A Film by Robert Downey. A Cinema V Presentation

BRANDON FILMS presents

A FILM BY **FEDERICO FELLINI**

ACADEMY AWARD WINNER!
BEST FOREIGN FILM



LA STRADA

TWO-TIME ACADEMY AWARD WINNER
ANTHONY QUINN
and **GIULIETTA MASINA**

5th AVENUE CINEMA
West of 5th Ave. • GR 7-7014

そしてその同じ発売号でロバート・ダウニー・シニアがヴォイス誌のアンダーグラウンド映画専門家であり自身も映画製作者であるジョナス・メカスのムービー・ジャーナル欄でのインタビューを受けている。メカスはインタビューの中で、ダウニーはこの映画で少しばかりメジャーになりすぎて、低予算の問題作ばかり取り上げているヴィレッジ・ボイス誌のインタビューには居心地が悪いのではないかとからかっている。

そして事実翌週のヴォイス誌に掲載されたほぼ全ページ広告が物語るように「パトニー・スウォープ」は多くの批評家たちにメジャーな媒体で取り上げられ

RIPPLE V

た。多分、配給会社は熱狂的なハードコア分子の援護によってアンダーグラウンドとメジャーがクロスオーバーする市場の観客たちにもこの映画はアピールすると直感的に感じたのであろう。

“0 スター（星なし）。パトニー・スウォープは今までみた作品の中で最も悪意に満ちた悪徳の映画である。この映画には吐き気がする。知性のある人が映画を見るつもりなら汚物用のビニール袋を持っていくべき。” — ワンダ・ヘイル、デイリー・ニュース

Page Forty-eight
the village VOICE, July 17, 1969



THE RUGOFF THEATRES

DADDY'S HOME
A-HUNTING
MURRAY HILL
3rd Ave. at 54th St.
MU 5-7652

Peter Fonda
EASY RIDER
BEEKMAN
65th St. at 2nd Ave.
RE 7-2622

"The funniest, most absurd, most intelligent movie you will see!"
—Jonas Mekas, N.Y.

PUTNEY SWOPE
The Truth & Soul Movie
CINEMA II
3rd Ave. at 60th St.
PL 3-0774-5

"Intelligent and perceptive! Literate and funny!"—Times
Rod Taylor • Claire Stronger • Blume Judy Geeson
3 INTO 2 WON'T GO
PIAZZA
58th St. E. at Madl
EL 5-3320

"Best movie I've seen in years!"
—Rex Reed
Frank Perry's
LAST SUMMER
CINEMA I
3rd Ave. at 60th St.
PL 3-6022

Winner!—Best Actress Award
Cannes Film Festival
Venezia Rodriguez
THE LOVES OF ISADORA
James Fox • Jason Roberts
SUTTON
57th St. and 3rd Ave.
PL 9-1411

Winner 2 Academy Awards!
"The thing for young people to see!"—N.Y. Times
ROMEO & JULIET
PARIS
5th Ave at 58th St.
MU 9-3313

"Best Film!"—Cannes Festival
IF...
AND
Peter Sellers
I LOVE YOU ALICE B. TOULAS
BRAMERBY
23rd St. near Lex. Ave.
GR 5-1860
See "Village Movies" for local listings

CLEAN SWEEP FOR SWOPE!

"Its humor is in the tradition of the new American frontier. It is funny, sophomoric, brilliant, obscene, disjointed, marvelous, unintelligible and relevant. If anybody tries to improve it, he should be sentenced. Downey is, as he likes to call himself, a prince."
—Vincent Canby, N. Y. Times

"Go see 'Putney Swope'. A pacesetter with outrageous wit, courageous creativity, guts and intelligence. Tells it like it's never been told before."
—Judith Crist

"I am quite certain that 'Putney Swope' is the funniest, the most absurd and the most intelligent film that you will see this week and next week and the week after." —Jonas Mekas, Village Voice

"Hard swinging irreverence. A slapdash grab bag of wild satire. The takeoffs are hilarious."
—Frances Herridge, N. Y. Post

"O ★ (No stars). 'Putney Swope' is vicious and vile, the most offensive picture I've ever seen. This one isretch-ed. If intelligent people must see it, take along yourretch bags."
—Wanda Hale, Daily News

"'Putney Swope' is a wild off-beat film, irreverent and funny, that has to be seen to be believed."
—Florence Somers, Redbook

"'Putney Swope' is a stinging, zinging, swinging sock-it-to-them doozey. It is going to take off and be one of the most talked about flicks in recent times. By all means I suggest, hell, I damn well insist you see 'Putney Swope' and be prepared for the nuttiest, wildest, grooviest shock treatment. Will leave you helpless with laughter."
—Bob Salmaggi, WINS Radio

"Funniest picture of the year! Not to be missed."
—Lita Eliscu, East Village Other

"A film for the young and the hip, for the open-minded and the broad-minded, and for those with the good sense to recognize the deft satiric wit of one of the most unorthodox and brilliant young film makers at work in America today. Mind-blowing, exuberant originality. What makes it so exciting is that it is timely, tough, relevant, and — equally important — hilariously funny."
—Joseph Gelmis, Newsday

"'Putney Swope' is one of the funniest movies I have ever seen, maybe the funniest. Surely the craziest. As if Lenny Bruce had written a script for the Marx Brothers."
—Martin Gottfried, WPAT

"A rewarding and rare opportunity to see genius at work. A devastating, fantastically funny film. Outrageous, degrading, brilliantly accurate and intelligent."
—Peter Davis Dibble, Women's Wear Daily

"Let us not mince words. It is the funniest movie I have seen in ages and it had me screaming with laughter. Go see it. It's a resounding winner."
—Stewart Klein, WNEW-TV

"A mad-mad comedy. Wildly imaginative. Downey is ahead of every other film satirist around in the amount of daring, nothing-sacred comedy he is ready to try."
—William Wolf, Cue Magazine



"PUTNEY SWOPE"

The Truth and Soul Movie

Cinema II. 3rd Avenue at 60th St. • PL 3-0774-5. A Film by Robert Downey. A Cinema V Presentation

メカスや他の批評家たちは間違いなく異なった見解を持っていた。そして後年、『パトニー・スウォープ』は多くの映画作家に影響を与えた。ジム・ジャームッ

RIPPLE V

シュやポール・トーマス・アンダーソンなど。特にアンダーソンは『ブギーナイト』でバック・スウォープというキャラクター（ドン・チードルが演じている）を創造してダウニーへのオマージュとしている。

—R.C.ベイカー

ムービー・ジャーナル

By ジョナス・メカス

1969 年 7 月 10 日

ロバート・ダウニー（『Chafed Elbow』の監督）の最新作は今週の木曜日にシネマ2にて公開される。私は確信する。この映画は読者が今週末、いや来週末そしてその後の週末にこの町で見られる映画の中で最も笑えて、狂っていて、そして知的な映画であることを。

私は映画の中で描かれている世界を全く知らないで、（映画は、マディソン・アヴェニューがどんなところか、どのように黒人たちが広告代理店を乗っ取るか、そして彼らはどうなっていくのかなどを描いている）、ロバート・ダウニーとは今回気ままな対話をする事とした。映画の宣伝担当のマーシャル・ルイスが時折会話に参画している。

ジョナス：私が思うに「パトニー・スウォープ」はコラージュの映画だと思います。屈折の、アイデアの、シチュエーションの、洞察の、再構築されたドキュメンタリーの、アイロニーの、パロディーのコラージュ。あなたの映画はプロットやキャラクターで見る映画ではなかった。そういう意味では、プレストン・スタージェスのコメディもコラージュです。ただ、あなたの映画は真のコメディとは違います。私には、ドキュメントのようにも思われる。問題は、私が広告業界というものを全く知らないことと興味もないことです。多分、映画の半分は私を素通りしてしまった。

マーシャル・ルイス：コラージュに言及したことは奇妙ですね。私はこの映画の発想を面白いと思いました。なぜなら狂っているから。広告業界もまさに狂っているんです。

ジョナス：狂気を描くためには作家はオーガナイズされていなくてはいけない。…いずれにしても、見る者の視点からするとあなたはコメディの中で最も難しいフォームを選んだと思います。「パトニー・スウォープ」の観客は全く何の

RIPPLE V

手引きも与えられないのです。腐敗を描くシーンと純粹を描くシーンが混じりあっているのです。正気と狂気とがです。ある意味で主題は語られずに突きつけられているだけ。そして多分、とても上手に突きつけられていると思います。広告業界に興味のある人は実地研修ツアーをこの映画で体験できるのではないのでしょうか。

マーシャル：これがマディソン・アヴェニューなんです。

ジョナス：多くの何とかアヴェニューでもあるでしょう。誰もが広告しています。誰もが売り手だ。

ダウニー：これはあらゆることのシンボルでもある。広告だけじゃない。

マーシャル：これはやりたくないことをやっている人間のことです。

ジョナス：私は、登場人物たちは彼らがやっていることを好きだと思いましたが…。ただ彼らはバカなことをやっている。出てくる人間たちはみな愚かで、彼らの仕事は馬鹿ばかしい上に腐っている。

マーシャル：唯一言えるのは、彼らは仕事を楽しんでいない。

ジョナス：私にはそここのところを理解できる手掛かりが見えませんでした。もともとニューヨークという土地にはそういう感じが無い。登場人物を見る限り、いかに愚かで腐敗していても、誰もが自分のやっていることを楽しんでるように思えました。ただ言えるのは誰もが情熱を持っていない。だからあなたの映画はドキュメンタリーっぽいのです。私から見ると、スウォープは広告代理店を経営したい。彼はそのことを信じている。そして彼の能力が許す限りのことをしている。それは他のバカな面々も同じです。白人でも黒人でも、能力の精一杯までやっている。

ダウニー：でも最後は全員「くそくらえ、早く金を山分けしておさらばしようぜ。」で終わる。

ジョナス：そうですね。ただそれは彼らの哲学からではなくて彼らの愚かさからなんです。仕事をちゃんとマネージできない。成功したいんだけど、どうやって会社を回したらよいかわからない。もしかしたら、彼らは腐敗するまでに至って

RIPPLE V

いないのかも。いずれにしても、私には全くわからない世界なんです。

ダウニー：広告に関わっている人間は数百万人という。広告を仕事にしていなくても広告を使っている人間がいるからだ。私は二年間業界で働いた。その時に見たことを全部この映画で見せることが私の禊だ。例えば、私と同じ仕事をしている黒人に私よりも低い賃金しか払われていないとか。これは、私がこの映画に黒人を登場させた別の理由でもあるのだが。

ジョナス：私は黒人の問題や腐敗に関してしつこく訴え続けてリビング劇場（Living Theatre）を攻撃したりしました。今は、更に一步前に進む時だ。みんなこの世界のシステムが腐っていることを知っている…。白人も黒人もお互いを誤った方向で利用しあうことができるのは明白ですよね。

マーシャル：一体どれくらいの人々が、あなたが知っていることを本当に知っているのでしょうか？

ジョナス：私が知りたいのは何故ドン・ルゴフがこの映画を気に入ったかです。できればインタビューしてその理由を知りたい。もしかしたら彼はこの映画がマディソン・アヴェニューのよいプロパガンダになると思ったのかも。

ダウニー：彼は私をクレージーだと思っているから引き受けたんだよ。彼は私が病気だと思っている。マジで。

マーシャル：ルゴフはよい作品を配給していますよね。『The Cool World』、『Nobody Waved Goodbye』、『柔らかな肌』、『Nothing but a Man』など

ダウニー：私の映画やテイラー・ミードの一連の作品やあなたのお兄さんが『Hallelujah the Hills』とかでやってきたことを、いわゆるメインストリーム市場にいる「ちゃんと映画を見に行く人たち」という層に浸透させるのに10年かかった。

ジョナス：ペキンパーの「ワイルド・バンチ」はあなたにも作れたかもしれない。あるいはテイラー・ミードやアンディ・ウォーホールにも。あれは、キャンプですよ…。今でも素晴らしい作品だと思っていますが…。そして、今はあなたが「パトニー・スウォープ」みたいな映画を作ってシネマ2にかけることができる。プロットのない映画。人々が言うところのハリウッド映画ではない映画。いわゆ

RIPPLE V

るコメディーでは定義されない映画。

ダウニー：これは悲しい映画なんだ。悲劇だ。不条理ドキュメンタリーさ。

ジョナス：私は『パトニー・スウォープ』は二回目の方が楽しめる映画だと思います。一度見ただけじゃわからない。

ダウニー：ジョナスは映画を掘り下げる気はないんだな。気に入らなければ書かなくていいんだ。この男は気に入らないものは書かない。

ジョナス：その通りです。そして私がこの映画を嫌いではないというのも本当です。ただ私はこの映画が扱っている世界を知らないし、その世界には興味もない。しかし、私はある意味この映画を楽しみました。この映画はドキュメンタリーのように私を教育してくれた。ケーススタディです。映画の主題に親しみがない場合、私は自分の好き嫌いの判断にとっても慎重になります。

ダウニー：これは私の最高傑作だよ。最も個人的な映画だし。でも本当のことをいうと私は違ったものも求めている。この映画からは他のどの作品よりも学ぶことが多かった。その意味で最高の作品と言っているんだ。

ジョナス：これは間違いなくあなたの映画の中で最も野心的な作品です。内容という意味で最も深い。

ダウニー：君が何でインタビューをするのかわからないな。君が「パトニー・スウォープ」の監督で私がインタビューした方が面白い気がする。

ジョナス：オーケー。何でも質問してください。

ダウニー：あなたはあなたの映画「パトニー・スウォープ」で可笑しいと笑ったところはありますか？

ジョナス：うーん。作家は自身の作品に距離を置いて対峙することが中々できない。私にとって「パトニー・スウォープ」のどこが本当に可笑しいのかを判断することは本当に難しい。これは私にとってはシリアスな映画なんだ。

ダウニー：「シリアス」とはどういう意味で？

RIPPLE V

ジョナス：つまり私の意図するところは…チャップリンやキートン、あるいはすべての偉大なるコメディアンにとって彼らのギャグやシチュエーションが本当に可笑しいことなのか…疑問に思える。いかなるアーティストにとってもコメディを作ることはとてもシリアスな作業だ。その意味で『パトニー・スウォープ』は私にとってシリアスな作品だと言いたい。

ダウニー：多分あなたは正しいのでしょう…。映画がアップタウンのアップパー・イースト・サイドの映画館で初日を迎えることをどのように感じていますか？それはあなたに影響を与えますか？

ジョナス：完成した作品が多くの人が見るに値すると信じていたら、それが娯楽作であろうが、政治劇であろうが、その機会に委ねる。「パトニー・スウォープ」はホーム・ムービーじゃない。観客のための映画なんだ。

ダウニー：あなたはあなたの映画に対する他人の意見を気にしますか？

ジョナス：褒められたら嬉しいよ…。しかし映画を完成させた直後というのは、賛辞にも批判にも感覚が麻痺しているものだ。熱くも冷たくも感じない。映画の雰囲気はまだ包まれていて、自分が一番の審判なんだ。だから他人や批評家が何を言っても気にならない。気にするのは配給会社と興行会社だ。

ダウニー：「パトニー・スウォープ」という題名はどこから？

ジョナス：他の名前でもよかったんだけど。大きな意味はない…。オーケー。どうしてなんですか？

ダウニー：わからないな。

ジョナス：製作費はどのくらい？

ダウニー：20万ドル強ってところ。200人以上の出演者がいるからね。

ジョナス：ルゴフが配給ですよ。プロデューサーは？

ダウニー：ドゥボフという名前の男でね。資金を提供してくれた。私は資金調達

RIPPLE V

には絡まなかった。誰もしたくないよな。

ジョナス：黒人俳優たちはどこで集めたのですか？

ダウニー：広告を「ショービジネス」に出したんだ。最初に来た 100 人をキャスティングした。

ジョナス：撮影期間は？

ダウニー：二か月。急ぎの撮影だった。代理店のオフィスは夜間しか撮影できなくて…。で、君はこの映画は好きじゃないんだよね？フィーリングを感じない？…

ジョナス：そうじゃないです…。ただこの映画は実体を欠くと言うか、明快さが足りないと思うんです。広告の世界が実像としてつかめない。なので、私の屁理屈を正しいと思わないでください。あなたの映画を例えば「ワイルド・バンチ」と比べても、あなたの映画の方が好ましいと認めます。つまり、私の抵抗は違うレベルでの話です…。あなた自身は最近好きな作品がありましたか？

ダウニー：デニス・ホッパーの「イージー・ライダー」。あと、『チチカット・フォリーズ』かな。「パトニー・スウォープ」はマディソン・アヴェニュー版『チチカット・フォリーズ』だ。君が好きな作品は？

ジョナス：「2001 年宇宙の旅」です。

ダウニー：批評を書いてないだろ。

ジョナス：例え好きな作品でも他の皆が批評を書く映画に関しては書きません。商業映画は 999 の媒体があり 999 人のコラムニストが書きます。でもアンダーグラウンド映画には私しかいない。私ともう 0.5 人かな…。なので、あなたの映画に関してもどうしたものか迷いました。あなたにはアップタウンに十分な場所がある。またそう願っています。ハリウッドからオファーは？

ダウニー：来ているよ。この 2 か月、沢山の映画と沢山のギャラのオファーを断った。私は自分のオリジナル脚本をやりたいんだ。でもハリウッドは原作物をやらせたい。監督のギャラだけで 75,000 ドルを提案してきたケースもあったな。

RIPPLE V

私はいままで 75 セントも貰ったことがないのに…。で、私は言った。「でもこの小説はクソだ。」で、そいつが言うのが、「知っているさ。で、いつ始められる？」私はこの手の映画は絶対にやらない。私の居場所はそこじゃない。ちょうど中間なんだ。アンダーグラウンドとハリウッドの中間にいつもいる。君は応援しないだろうけど…

ジョナス：それは違います。私がアンダーグラウンド映画しか取り上げないとしても私が他の映画を嫌いだという事ではない。私のエネルギーは限られています。そして、つい最近までは私以外の批評家はアンダーグラウンド映画に関して書かなかった…。「中間」の映画にはアップタウンの「知性派」や「リベラル派」がいます。つまり、私の選択は、好きか嫌いではなく「エネルギー戦略」なのです。計算しています…私は世の中から無視されている領域に集中しています。個人的で物語のない映画です。アンドリュー・サリスをヴィレージ・招いたのも戦略のひとつです。私のアヴァンギャルドものに費やす時間を増やしたかった。

ダウニー：アンドリューは結婚してからコラムが短くなった。

ジョナス：そうなんです。それで私のが長くなった…。私はアホじゃないので結婚などしませんけど…。ええと、どこまで行ったんでしたっけ？そうです。どこにも扱ってもらえない映画がとてたくさんあります。どうして私の小さなコラムを商業映画に費やさなきゃならないのでしょうか？商業映画の製作者たちから、ほとんどが私の良い友人たちですが、責められることがよくあります。「何で、評論してくれないんだ？気に入らないのか？それとも別に理由があるのか？」と。しかし、私の誌上でのスペースはあまりに貴重だと思っています。今こうしてこのスペースを差し上げているのにも罪悪感を持つほどです。

ダウニー：だからアンディの映画はもう書かない？

ジョナス：その通りです。彼はもう私を必要としない。私は自分を律して書かないのです。

ダウニー：じゃあ、何で私の映画を扱ってくれるの？

ジョナス：同胞意識からですかね。昔日の思い出でしょうか。あなたがアンダーグラウンドにいた時の、チャールズ・シアターやオープン・ハウスに映画をかけて

RIPPLE V

いた頃の。昔の良き思い出です…。

ヴィレッジ・ボイス

原インタビューは 1969 年 7 月 10 日に掲載

この記事はヴィレッジ・ボイス・アーカイブから 2021 年 7 月 7 日に掲載

RIPPLE V



追悼

ロバート・ダウニー・シニア：1936-2021

セルジオ・ミムズ

映画作家であり俳優でもあったロバート・ダウニー・シニアがリチャード・ドナーと同じ週に他界したことは奇妙に納得させられる出来事であった。パーキンソン病との長い闘いの末 85 歳で亡くなったダウニーとドナーはともに作品の幅の広さと多芸性で知られるユニークな芸術家で、いまや存続が危ぶまれる映画監督という絶滅危惧種を体現していた。

ドナーは昔ながらのハリウッドのスタジオシステムに生きた A リストの監督で一コマたりとも不備はなく完璧に構成されていないマスターショットは存在しないプロフェッショナルであった。一方ダウニーは真の異端児であった。彼はインデペンデントのクリエイターであり続けハリウッドのナンセンスに惑わされることはなかった。彼は映画の境界線を探りそして押し広げた。彼には観客におもねる市場調査を高層ビルのオフィスで現場の頭越しに行う背広組の存在が我慢ならなかった。彼は自分が作りたいものを、自分に正直に、たとえば観客や批評家が気に入らなくて作る作家であった。－「気にするな。きっと誰かが見に来るよ。」－

しかし、実は、インデペンデントの映画製作者として、ダウニーのスタイルは、レオ・マッカレーやラオール・ウォルシュやジョン・ヒューストンといったハリウッド黄金時代の巨匠たちのそれと共通点を持つ。彼らと同様にダウニーは映画を作り始める前に既に波乱万丈で冒険的な人生を送っており、それらの経験が、UCLA の映画学科卒業生たちなどとは比べ物にならない人間とその行為への洞察力の源となっているのである。

1936 年にハンガリー系ユダヤ人の父親とアイルランド系の母親の子供として生まれたロバート・エリアス・ジュニアはアメリカ陸軍に入隊する。実はその時彼

RIPPLE V

はまだ入隊年齢に達しておらず、継父の姓名であるダウニーを名乗った。除隊後はプロ野球のマイナーリーグでプレイしたかと思うとゴールデン・グラブズのボクシングのチャンピオンになったりした。その後、芝居の戯曲を書いたりして、1960年代前半に自主映画を作り始める。

この時代彼は『Babo 73』や『Sweet Smell of Sex』などの一時間に満たない長さの映画を作るが、最も注目を浴びたのは1966年の『Chaffed Elbows』であった。この作品でダウニーは自身が撮影した写真と実写映像を合わせてアニメーションにするという革新的な技法を生み出す。映画の物語は、貧しい生活保護を受けている男が自分の母親に恋をして結婚までするが、子宮摘出手術をしたり、自分自身を生きる人間芸術作品として売り出したり、死線をさまよって天国に行ったりした結果ついにロック・シンガーになるというとんでもないものである。異常性を追求した異端の映画であったが、ケネス・アンガー監督のゲイ&バイク&オカルトのアイコンともいえる作品「スコルピオ・ライジング」とともに7か月間ニューヨークの映画館でロングラン上映されると一気にセンセーションを巻き起こし、その後もシカゴのアードヴァーク劇場といった全米各地のアート系の映画館で2本立て上映されることになる。

1969年には、ダウニーの最高傑作であり問題作である「パトニー・スウォープ」を送り出す。ブラック・レボリューション運動からマディソン・アヴェニューの広告業界、資本主義までを串刺しにして、残酷な毒気たっぷりに風刺したコメディ映画は善も悪もなくダウニーの特許である異常性が詰まっている。ある広告代理店で、名ばかりの黒人役員（アーノルド・ジョンソンが演じるが声はダウニー自身が吹き替えている）が、創設者の急死を受けて行われた他の役員たちによる浅はかな計らいの結果社長となってしまう。

スウォープはすぐさま会社の名前を「トゥルース・アンド・ソウル」に変更し、過激派の黒人や扇動者やイカさま師や異常者たちを雇い（偉大なるアントニオ・ファーガスもその中の一人。彼のデビュー作であり、劇場で芝居を見たダウニーが即座にキャスティングした。）、それまでのシステムを全て破壊し、社会や白人至上主義やアメリカの古き良きモラルを攻撃するテレビ・コマーシャルを作り始める。しかし、革命のための行いは方向を見失い、欲と腐敗が染み込み始める。結果大いなる試みは煙と化す。「パトニー・スウォープ」は人間とその欲望を冷笑する映画である。ダウニーにかかっては誰も安全ではないし何も見過ごされない。我々はみな罪人でありその罪に罰せられるのである。

RIPPLE V

「パトニー・スウォープ」に続いて 1970 年にはユニテッド・アーティスト社により MPAA の新レーティングシステムで X 指定となった『Pound』が公開される。安楽死を待つ野良犬の集団という尋常ではない世界を描いた 1961 年のダウニー自身の戯曲の映画化で、犬は俳優にメイクと衣裳をつけさせて演じられた。そのうちの一人が、当時五歳だったロバート・ダウニー・ジュニアで子犬を演じている。ダウニーの眼には犬と人間は生存競争においてはたいして変わらないものとして映る。映画は故意に卑猥で理不尽であり、不快感に満ちている。これがダウニーの真骨頂である。MPAA が映画監督に与えた新しいレーティングを活用して、その時代の限界を追求したのである。現代の基準では X にも NC-17 にも制限されることはないと思われるが、実際、楽しく最後まで見られる映画ではない。映画のラスト・シーンはナチスの強制収容所のガス室を想起させる。ダウニーは観客を穏やかな日常から引きずり出し社会と対峙させ不安にさせることを愛していたのだ。

その他の傑作に 1972 年の『Greaser's Palace』がある。キリストの物語をひっくり返した映画で、公開当時、映画評論家のジョナサン・ローゼンバウムによって「毒性西部劇」と形容されたため、西部劇のサブジャンルとしても認識可能だが、60 年代後半から 70 年代に登場した『Zacharia』、「エル・トポ」、『The Hired Hand』といったカウンター・カルチャーのムーブメントに影響された作品で、より形而上的なアプローチの作品になっている。

ニューメキシコの旧き西部の町を舞台にした、昔の喜劇芸人の衣装を着たジェシーという男が主人公の物語である。彼は時に病人を癒し、時に手の聖痕から血を流し、時に水上でタップダンスをしながら茫漠たる荒野をさ迷い、奇跡を起こす。もちろん、ジェシーは最後には十字架にかけられる。ダウニーにとっては、信仰でさえ人種や資本主義やあるいはショー・ビジネスと同じ程度に魅力的な風刺のための題材なのである。

1973 年、ダウニーは CBS テレビの生放送で、失明して帰国したベトナム帰還兵が新しい人生を踏み出す姿を描いたデヴィッド・ラーベの戯曲『Sticks and Bones』を演出して世の中を攪乱してみせる。ダウニー版は、あまりにも挑発的だったためコマーシャルを提供するクライアントがつかず、なんとコマーシャルなしで放映された。

その後も映画を監督し続け、時にはテレビも演出し、役者としても『L.A.大走査線/狼たちの街』、『マグノリア』、『ブギー・ナイツ』そして TV シリーズ『Matlock』などに出演した。彼の最後の記憶すべき映画は 1997 年のコメディ『ヒューゴ・

RIPPLE V

プール』。ダウニー自身が、結末が気に入らないと語っていて、それには反論の必要はないかもしれない。可笑しいが一風変わった、もちろん、世の中の陳腐な決まりごとを破壊するいつものダウニーの居心地の悪い映画である。

ダウニーと妻との間の体験をもとにした作品で、プール掃除人のアリッサ・ミラノがキャシー・モリアティとマルコム・マクドウェルが演じる手のかかる両親の面倒を見ながら、精神を病んでいる映画監督（ロバート・ダウニー・ジュニア）や ALS 患者（パトリック・デンプシー）や狂ったギャングたちといった様々な人間たちに出会う物語である。

「ヒューゴ・プール」は、思いつく限り狂った状況下で偶然出会った人間たちによって築かれる人間関係を描いた作品である。人の一生は、たった一日の出来事が残りのすべてを変えてしまう旅なのだ。「ヒューゴ・プール」は我々に人生が与えるどんな異常なことも受け入れよと教えている。

彼の訃報に接して、「ダウニーはイラつく奴だった」と言った者がいる。イラつく奴、それはまさにダウニーであった。イラつく扇動者の彼が目指したものは世の中の常識をひっくり返すことだった。彼の映画は我々の姿を映し出したものなのだ。少々の善なところと、多いなる悪なところ。彼は自由を武器に映画の境界線を許される限り遠くへ押し進めたのだ。芸術家であるということは自由であるということ。ダウニーは映画を想像もつかない方法で解放した。

Roger Ebert.com

2021 年 7 月 8 日

RIPPLE V

CREDITS:

Stan Gottlieb	...	Nathan
Allen Garfield	...	Elias, Jr.
Archie Russell	...	Joker
Ramon Gordon	...	Bissinger
Bert Lawrence	...	Hawker
Joe Engler	...	Mr. Syllables
Arnold Johnson	...	Putney
David Kirk	...	Elias, Sr.
Don George	...	Mr. Cards
Buddy Butler	...	Putney's Bodyguard
Vincent Hamill	...	Man in White Suit
Tom Odachi	...	Wing Soney
Ching Yeh	...	Wing Soney, Jr.
Spunky-Funk Johnson	...	Mr. Major
Joe Fields	...	Pittsburgh Willie
Norman Schreiber...		Messenger
Bob Staats	...	Mr. War Toys
Alan Abel	...	Mr. Lucky
Sol Brawerman	...	Mr. Dinkleberry
Ben Israel	...	Mr. Pit Stop
Mel Brooks	...	Mr. Forget It
Louise Heath	...	Secretary
Barbara Clarke	...	Secretary
Catherine Lojacono...		Lady Beaver
JohnJohn Robinson...		Wayne
Charles Buffum	...	Director
Ron Palombo	...	Assistant Director
Wendy Appel	...	Script Girl
Antonio Fargas	...	The Arab
GeeGee Brown	...	Secretary
Vance Amaker	...	Wall Man
Al Green	...	Cowboy #1
Chuck Ender	...	Cowboy #2
Anthony Chisholm...		Cowboy #3

RIPPLE V

Walter Jones ...	Jim Keranga
Khaula Bakr ...	Mrs. Keranga
Melvia Marshall ...	Little Keranga
Annette Marshall...	Little Keranga
Andrea Marshall ...	Little Keranga
Laura Greene ...	Mrs. Swope
Ed Gordon ...	Mr. Victrola Cola
Eric Krupnik ...	Mark Focus
George Morgan ...	Mr. Token
Abdul Hakeim ...	Bouncer
Allan Arbus ...	Mr. Bad News
Jesse McDonald...	Young Militant
C. Robert Scott ...	Militant #1
Leopoldo Mandeville...	Militant #2
Vince Morgan Jr....	West Indian
Al Browne ...	Moderate
Marie Claire ...	Eugenie Ferliger
Eileen Peterson ...	Narrator
William H. Boesen...	Bert
Carol Farber ...	Secretary
Cerves McNeill ...	Youngblood
Carolyn Cardwell...	Borman Six Girl
Charles Green ...	Myron X (alias Rufus)
Pepi Hermine ...	President of the United States
Ruth Hermine ...	First Lady
Paul Storob ...	Secret Service Man
Larry Wolf ...	Mr. Borman Six
Jeff Lord ...	Mr. Bald
Tom Boya ...	Mr. O'Dinga
Major Cole ...	Idea Man #1
David Butts ...	Idea Man #2
Franklin Scott ...	Idea Man #3
Paul Alladice ...	Idea Man #4
Exit ...	Idea Man #5
Ronald Dyson ...	Face Off Boy
Shelley Plimpton ...	Face Off Girl

RIPPLE V

Elzbieta Czyzewska...	Putney's Maid
Paulette Marron ...	Air Conditioner Girl
Delilah ...	Stewardess #1
Carol Hobbs ...	Stewardess #2
Birgitta ...	Stewardess #3
Marco Heiblim ...	Lucky Passenger
Grania ...	Interviewer
Peter Maloney ...	Putney's Chauffeur
Larry Greenfield ...	Lead Reporter
Marie Claire ...	Nun
Lloyd Kagin ...	Billy Reilly
Perry Gewirtz ...	Sonny Williams
Herbert Kerr ...	Bodyguard #2
Hal Schochet ...	President Mimeo's Chauffeur
George Marshall ...	Mr. Executive
Donald Lev ...	Poet
William H. Boesen...	Mr. Lunger
Fred Hirschhorn ...	Mr. Bourbon
Donahl Breitman...	Mr. Ethereal Cereal
Peter Benson ...	Mr. Jingle

RIPPLE V

Putney Swope

Featuring: Arnold Johnson & Laura Greene

With: Buddy Butler, Antonio Fargas, Vincent Hamill, Lawrence Wolfe

Costume Design: New Breed Inc.

Special Effects: Bill Daley, Tom Daniel, Dan List, Josh Zander

Sound by Michael Scott

Assisted by Bruce Perlman

Mixed by Tom Dillinger

Original Music: Charley Cuva

Music engineering: David Baker

Art Director: Gary Weist

Script Supervision: Sharon Sachs

Casting: Grania Gurievitch

Assistant Cameraman: Norris Eisenbrey

Lighting: Paul Goldsmith, Arthur Marks ...

Head Grips: Alex Hitchcock, Don Walters

Coordinator: Barbara Wise

Production Assistant: Wendy Appel, Eric Krupnik

Costume Coordinator: Joanne Schielke

Opticals: The Optical House

Titles: Chermayeff & Geismar Associates

Director of Photography: Gerald Cotts

Associate Producer and Production Supervisor: Ronald Sullivan

Film Editor: Bud Smith Assistant: Pat Dobie

Produced by Herald Productions, Inc.

Written and Directed by Robert Downey (a prince)